

沖縄先史時代の貝文化

—韓国国立済州博物館特別展における講演記録—

Shell Culture of Prehistoric Okinawa

安里 翠淳

Asato Shijun

ABSTRACT: This paper reviews the prehistoric shell culture of Okinawa in relation to the special exhibition of the Maritime Cultural Exchange titled 'Discovery of Prehistoric Lives -Shell Artifacts of Okinawa-', held at the National Cheju Museum of Korea from October 10 to November 27, 2005. Shellfish were not only an important food source for the people of prehistoric Okinawa but also a useful raw material that supported their daily lives. Moreover, they became trade goods that fostered relations with the outside world. Shell culture provides a key to the lifestyles, culture, foreign relations, and cultural genealogy of prehistoric Okinawa.

本文は、2005年10月10日～11月27日の間、韓国済州道の国立済州博物館による海洋文物交流特別展「先史時代 生活の発見—沖縄の貝製品—」に関連して、同年10月13日に同館において開催された講演会の記録である。その内容は同展の図録に掲載された「沖縄先史時代の貝文化」とほとんど同じであるが、外国での刊行であり頒布先が限定されていることから、ここに講演の方の記録を残しておくこととした。

＜講演内容＞

皆さん、こんにちは！

さて、私は「沖縄先史時代の貝文化」をテーマに話をしますが、はじめに韓国国立済州博物館が、沖縄の歴史についての特別展を開催されたことに対して、心より感謝いたします。日本の南にある小さな島々である沖縄の歴史や文化について、外国の博物館が関心をもってくださることは、とても嬉しいことです。

それでは、これから沖縄先史時代の貝文化についてお話をいたします。

話の要点はお手元の冊子に掲載されていますので、その中にある貝製品の図や、図録をお持ちの方はその写真を見てもらいながら話をていきます。

まず1番目に、沖縄の地形環境について話します。一言でいえば沖縄は「サンゴ礁に囲まれた島々」だということです。沖縄は日本の九州島と台湾の間にあり、南西諸島の中の南半分の島々で、先史時代から人間の住んでいた地域は沖縄諸島と先島（宮古・八重山）諸島です。しかし、先史時代から王国時代には沖縄諸島の北にある奄美諸島も沖縄と同じ文化圏に属していて、この地域を含めて琉球諸島とも呼ばれています。

図1を見てください。

気候は亜熱帯に属し、島々の周囲にはサンゴ礁が取り巻いています。このようなサンゴ礁は先史時代の人々の生活にとって、とても重要なものでした。サンゴ礁の境界は外海の荒い波を碎くので、沖で白い波のリーフとなっています。そこから内側は浅く、波の少ない穏やかな礁湖（ラグーン）となっ

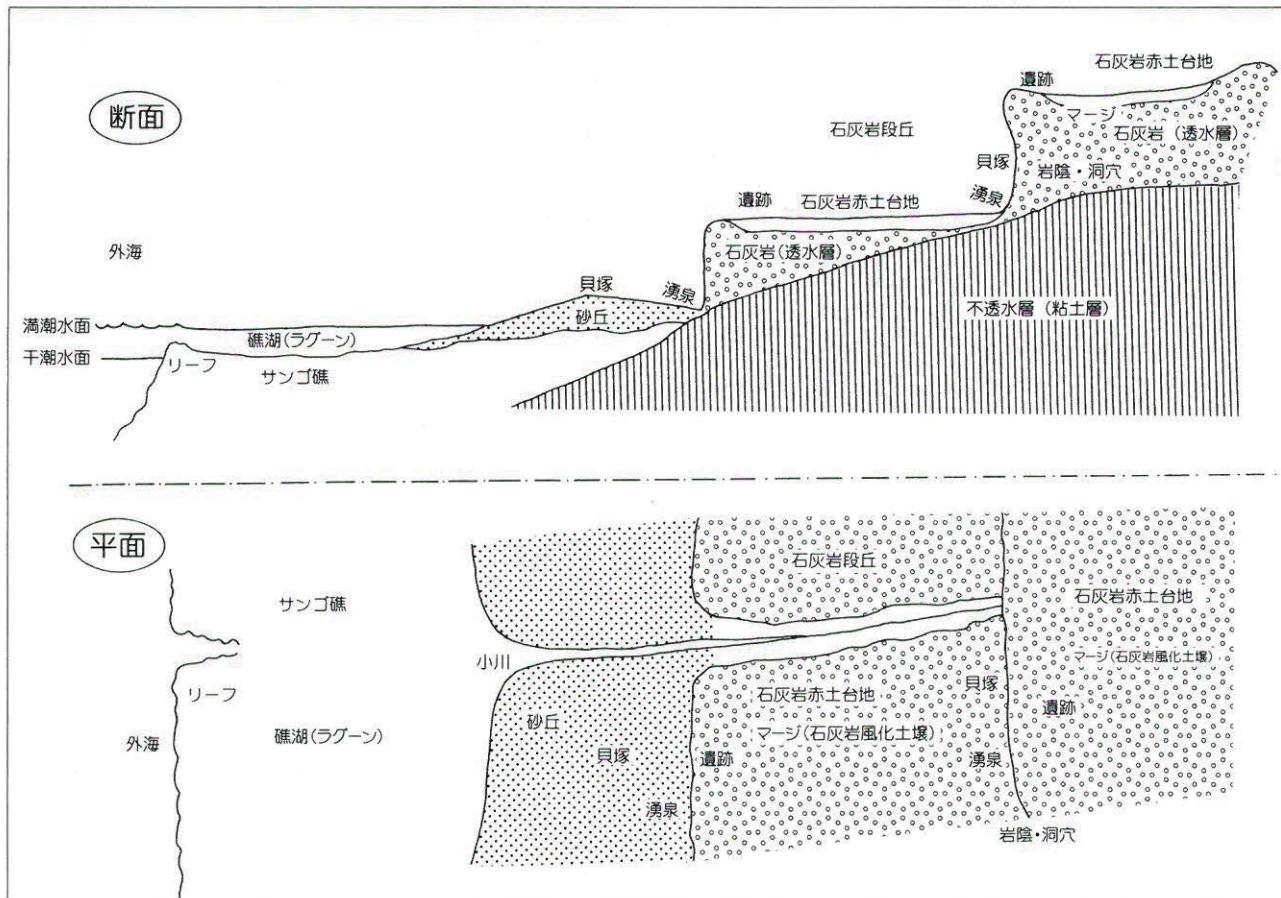


図1 沖縄島中・南部の石灰岩地帯の湧水と地形の概念図

ています。そして、礁湖には豊かな海草が繁り、多くの貝や魚が棲んでいます。

このサンゴ礁に対面する陸地は砂浜の湾と岩場の岬とが交互に連なっています。湾の海浜には後背部の陸地から小川が海に注いでいて、重要な生活用水を提供しています。

このような、サンゴ礁の海と小川をひかえた砂浜や、湧き水を崖下にひかえた近くの丘の上に、先史時代の人々が生活していました。砂浜にも、丘の付近にも海産貝の貝塚が残されているので、先史時代の沖縄の人々は、サンゴ礁の海で採れる魚や貝を重要な食料資源として利用する生活を基本にしていたことがわかります。

このようなサンゴ礁に囲まれた島で営まれた、海洋民としての暮らしを基盤にして展開したのが、沖縄先史時代の貝文化です。豊富な貝製品を生み出した沖縄先史時代文化を「サンゴ礁文化」と称することもあります。

2番目は、沖縄先史時代の文化圏についてです。図2を見てください。南西諸島は歴史上の古記録には「南島」と記されていることから、この南島全体を区分して、種子島・屋久島を「北部圏」、奄美・沖縄諸島を「中部圏」、先島（宮古・八重山）諸島を「南部圏」と称することもありますが、ここでは奄美・沖縄諸島以南の「琉球諸島」だけを扱うこととします。

琉球諸島の先史時代文化は奄美・沖縄諸島の「北琉球圏」と宮古・八重山諸島の「南琉球圏」にわけられます。北琉球圏は日本の縄文時代の人々が島伝いに移住してきた島々で、弥生時代にも日本との交渉が続けられています。南琉球圏は北との関係はあまりなく、その源流は東南アジアなどの南方文化に関連するだろうと推定されています。

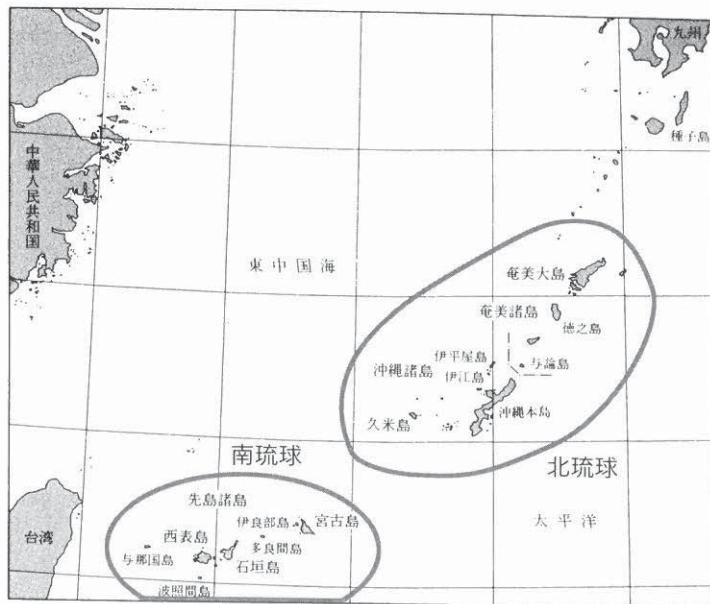


図2 二つの先史文化圏

南北両文化圏ともそれぞれの文化的系統は異なるのですが、いずれもサンゴ礁に囲まれた島々を生活基盤として、海洋民的な暮らしをしていたというスタイルは共通しています。そこから生み出された貝文化には、北琉球圏や南琉球圏独自のものと、両方に共通するものがあります。

3番目に、沖縄先史時代の貝塚の特徴について話します。

沖縄の新石器時代のことを「貝塚時代」ともいいますから、沖縄の先史時代遺跡からは、多くの貝殻が出土します。しかし、文化層に貝殻だけがいっぱい溜まっているような「純貝層」ではなく、ほとんどは腐植土から成っていて、その中に土器、骨器、石器、貝器などが混ざっている「混土貝層」です。

一方では、先史時代のある時期には、遺跡にほとんど貝殻や魚骨・獸骨が残されていないという現象もあります。それは、一時的にその時期に山や海の動物の数が減ったからなのか、それとも農耕生活をしていたために、山や海の資源を採取しなかったのか、その理由はまだわかっていません。

新石器時代に最初に沖縄諸島に居住した人たちは、約6500年～7000年前頃の日本・九州方面から渡来してきた縄文時代人でした。その後約5000年前頃にも九州の縄文人が渡来してきましたが、いずれも沖縄諸島に長期的に適応することはできなかったようです。子孫に継承できぬうちに人口が途絶えてしまうということの繰り返しでした。

しかし、約4000年前頃からはしだいに適応に成功し、約3500年前頃にはほとんどの島々に拡散して住むようになりました。このように、沖縄諸島の先史人の生活には、渡来と、適応、拡散の長い歴史があります。

ところが、全体を通して共通するのは、はじめから沖縄諸島の先史人たちは、サンゴ礁の海の貝や魚を利用しておらず、遺跡に貝塚を残しています。おそらく、かれらは出発地の九州においても、元々海岸地域に住んでいた海洋民だったものと考えられます。

そして、約2千数百年前以降の先史時代後期には、海洋への適応が最高潮に達し、サンゴ礁に囲まれた礁湖（ラグーン）を主な食料資源の場とする、海洋民としての暮らしと文化を発達させました。貝塚はこの後期の時期が最も規模が大きく、貝の種類も多くなっています。

なお、約3500～3000年前の貝塚には、陸産貝のマイマイ類も多量に含まれていますが、それは食料ではなく、自然に集まったものが混入しただけのようです。また、淡水産の貝も少量あります、貝製品としては利用していません。したがって、沖縄先史時代の貝文化というのは、海産貝を利用する文化です。

貝塚から出土する貝の種類や量は、時期によってきまつた傾向があります。例えば、約3500～3000年前の時期にはアラスジケマンガイが多いとか、後期の前半には大型のシャコガイやサラサバティが目立つなどの特徴があります。また、同じ時期でも貝塚によっては、ウミニナ類、マガキガイ類が特に多いなどの特徴をもっている場合もあります。

さらに、貝はその種類によって棲んでいる場所がきまっていますので、貝塚にどの種類の貝が多く含まれているかを調べれば、当時の遺跡付近の環境を推定することができます。

これによると、現在の地形環境と大きな違いはないようです。やはりサンゴ礁とその近くの外海、河口付近の干潟、マングローブの茂った湾などが、遺跡近くにあって、先史人たちがそこで貝や魚をとっていました。外海では素もぐりで貝をとりましたが、ほとんどは遠浅の海域で、干潮時に徒歩で貝を採取していました。

4番目に食料としての貝が、先史人の暮らしのなかでとても重要であったことを話します。

沖縄の先史人にとって、貝は第一に食料として採取されました。もちろん、後で話すように、先史時代後期には、交易用として特別に採取する場合もありました。しかし、ほとんどは貝を食べた後に、その殻を貝器や貝装身具などに二次的に利用したと見られます。

貝をはじめとする海産物は、先史人にとって、主な食料でした。それは、先史時代の遺跡がほとんど海岸の砂浜か、海岸に近い丘に形成されているからです。島の中央に立つと、太平洋と東中国海の両岸の海が見えるほどの狭い沖縄島ですが、それでも先史人はより海に近い海岸に集落をつくりました。

当然、先史人は山野の草や木の実も食料にしていましたが、それよりも海産物を採取するのに便利な場所かどうかが、居住地を選ぶときの最優先の条件でした。その条件を満たした上で、水の利便や、地形的な見通しの良さ（安全性）などが考慮されたようです。このように、海産物を主な食料資源とする暮らしが、日常の生活基盤として存在したことが、貝文化の展開につながっていったといえます。

ひとつの貝塚からは最大で約300種類の貝が確認されていますが、一般には150前後の種類の貝が出土します。そのなかで、先史人が主な食料としていたのは、サザエ・マガキガイ・サルボウ・しゃこがい・サラサバティ・アラスジケマンガイなどです。図3（写真）を参照してください。

亜熱帯の海といえども、これらの貝は年中いつでも豊富に採れたのではなく、ある程度の季節性があることは、現在の貝類の生態からも明らかです。それでは、先史人は季節に関わりなく貝を採っていたのか、それとも乱獲によって貝が減るのを防ぐために採取時期を規制していたのかについては、まだ研究が進んでなくてわかりません。あるいは、豊富な季節に採取した貝を干物にして保存し、年中食べていたかも知れません。

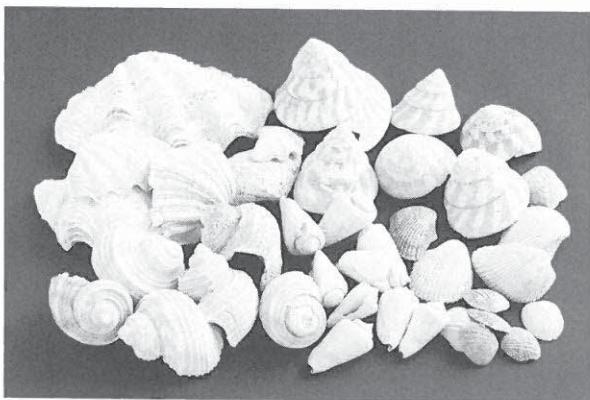


図3 沖縄先史人の主な食料貝

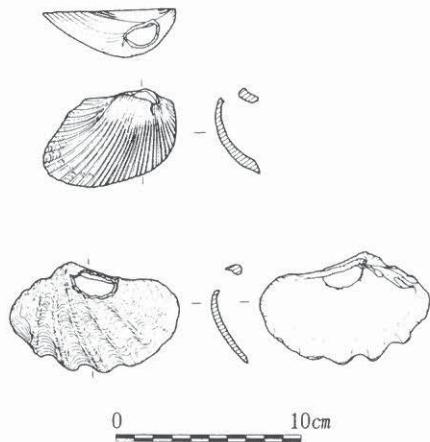


図4 網の貝錘
(「伊武部貝塚」沖縄県教育委員会 1983)

5番目に、用具や用品の素材としての貝の利用について話します。

貝はそのほとんどが第一に食料として採取されましたが、貝殻は食べられないので、一般には廃棄され、それが積もって貝塚になります。しかしその一部は、貝殻のもつ特性を利用して、先史人の暮らしと文化を支える用具・用品として再利用されました。

貝のもつ特性とは、第一に加工がしやすいことです。貝殻は削る、打ち欠く、割る、潰す、擦り切る、磨くなどの加工作業を受け入れる性質をもっています。ですから、いろいろな形の貝器を作ることができます。

第二に、貝のもつ自然形態です。貝殻は輪や容器などに利用する際、すでにその目的物の基本形態を備えていますから、これにさきほど言った加工作業を加えれば貝器になります。

沖縄の先史人は海産貝をよく利用して、暮らしのなかのさまざまな用具、用品を作り出しました。狩猟・漁労活動に用いる貝のヤジリ、貝の網錘、日々の生活に使う貝碗、貝匙、貝杓子、貝斧、そして装身具あるいは呪術具としてのペンダントや貝札（符）など、貝の材質と形態をうまく利用した貝文化を発展させました。

一方、貝殻が交易品として扱われた時期には、これまで採取活動をすることのなかった深い海に潜り、特定の種類の貝を意図的に採取しています。この場合は第一に交易品であり、食べたかも知れませんが、それは付隨的な行為でした。

6番目に北琉球（奄美・沖縄諸島）の先史時代の貝文化について話します。
どのような貝製品があるのかについて話すのですが、実は研究者によって用語の使い方が異なる場合もあります。そこで、最も体系的な分類をしている熊本大学教授木下尚子氏の分類を参考にして、紹介をしていきます。（木下尚子「南島の古代貝文化」『南島貝文化の研究』427~443頁、1996、法政大学出版局）

① 図4を見てください。

これは「貝錘」で、主にリュウキュウサルボウ、しゃこがい、カワラガイなどの二枚貝に孔を開けて、網の端に結んで錘としたものです。

② 図5を見てください。

これは「貝の釣り針」で、琉球諸島全体でも奄美で1個、沖縄で1個の計2個の発見で、きわめて

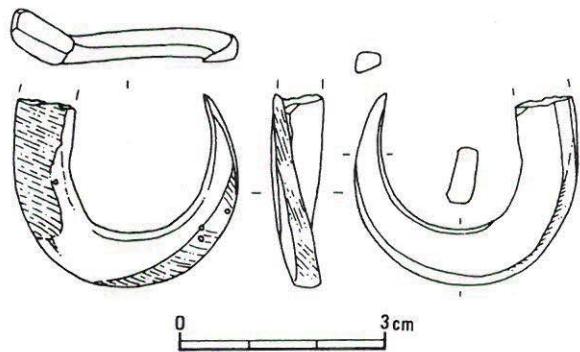


図5 貝製釣り針
(「伊是名貝塚」伊是名貝塚学術調査団 2001)

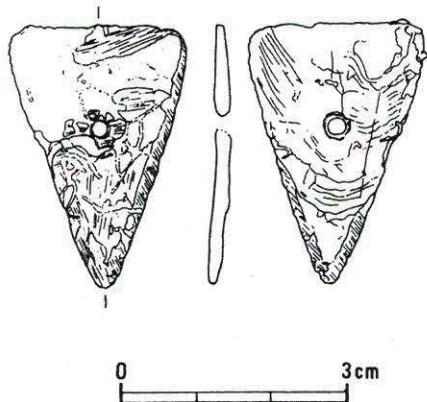


図6 貝の鏃
(「伊是名貝塚」伊是名貝塚学術調査団 2001)

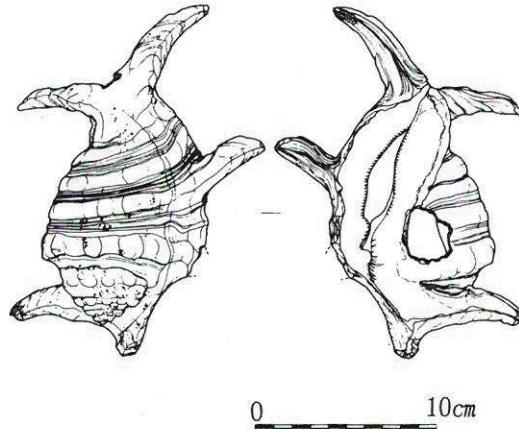


図7 貝製刺突具
(「伊武部貝塚」沖縄県教育委員会 1983)

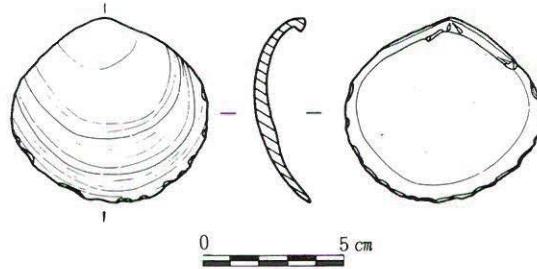


図8 貝刃
(「伊武部貝塚」沖縄県教育委員会 1983)

わずかの例しかありません。このことは、沖縄では釣り漁はあまり発達しなかったことを示しています。サンゴ礁の遠浅のラグーンは、あえて捕獲効率の低い釣り漁をする必要がなかったものと考えられます。

③ 図6を見てください。

これは「貝のヤジリ」で、クロチョウガイを加工したものです。かなり薄く、3～6 cmの二等辺三角形で、中央に孔をあけたものが多いです。縄文時代並行期の古い時期から出土しています。浅い海で魚を突くのに使ったものと考えられていますが、これは装身具のペンダントだとする見方もあります。

④ 図7を見てください。

これは「貝製刺突具」で、すべて巻貝で、とくにスイジガイの突起（棘）部の先を研磨して、刃先状にしたものが多く見られます。この貝製品は海で貝などを採取するときに、突き刺して取り出す道具ではないかと考えられています。他にクモガイ・サソリガイの突起部、イトマキボラの殻軸の先を研ぎだしたものもありますが、発見数は少ないです。

⑤ 図8を見てください。

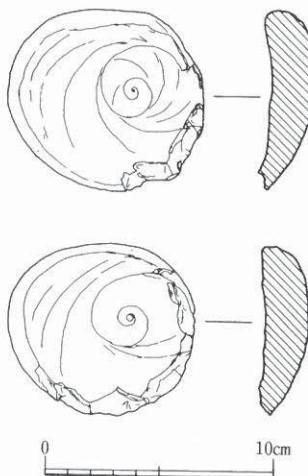


図9 貝蓋こう打器（「具志川島遺跡群
親畑貝塚」伊是名村教育委員会 1993）

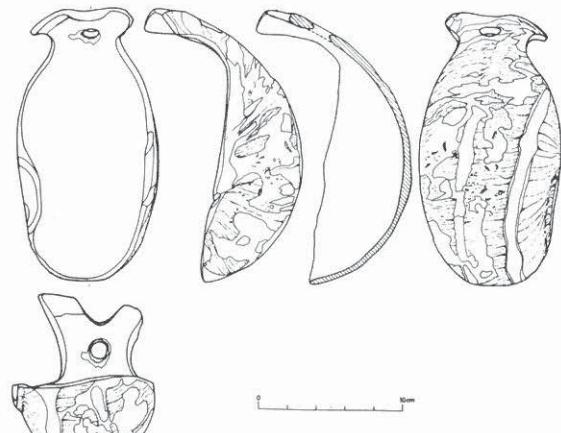


図10 貝柄杓
(「清水貝塚」具志川村教育委員会 1989)

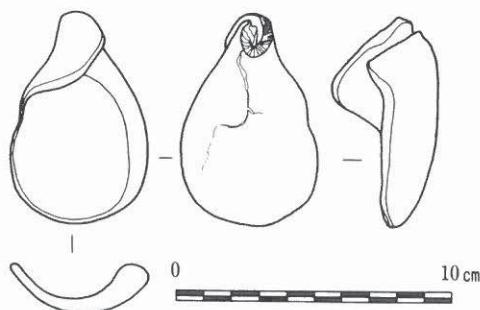


図11 貝匙（「渡具知木綿原遺跡」
読谷村教育委員会 1978）

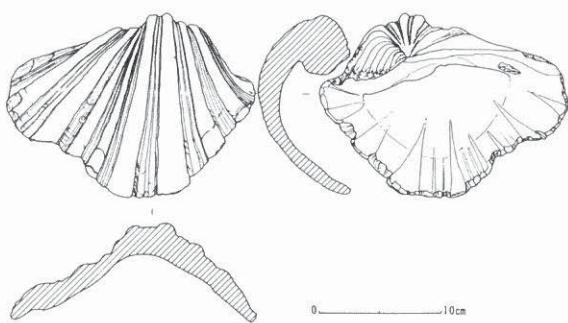


図12 貝皿
(「ナガラ原西貝塚」伊江村教育委員会 1979)

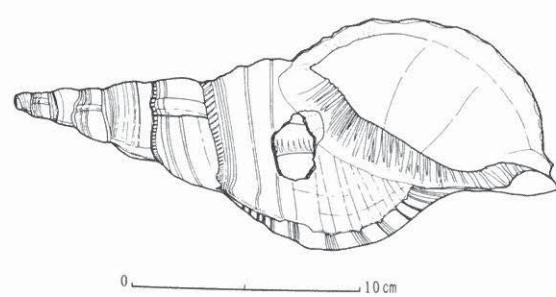


図13 貝煮沸器？
(「勝連城跡南貝塚」勝連町教育委員会 1984)

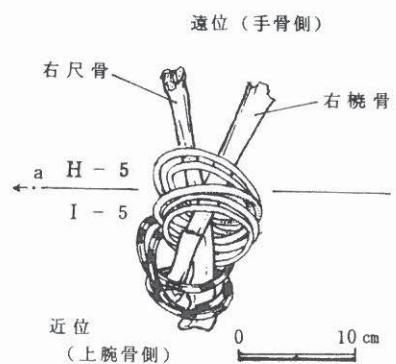


図14 貝輪（腕輪）（「具志川島遺跡群岩立
遺跡」伊是名村教育委員会 1979）

これは「貝刃」で、シレナシジミ、クロウチョウガイなどの二枚貝の縁をギザギザの刃にしたものや、磨いて鋭利な刃にしたものがあります。物を切るためのナイフと見られます。

⑥ 図9を見てください。

これは「貝蓋製敲打器」で、ヤコウガイの蓋を手でもって、対象物に打ちつける道具で、琉球諸島の広い範囲に分布します。以前は剥離した部分が刃の機能をもつスクレイパーだといわれていましたが、観察の結果、自然の貝蓋をたたいて使ったために、欠けてできたものとする見方が有力な説になっています。また、これは他の大型貝に孔を開けるときに、破損を防ぐために内側に添える「当て具」だとする見解もあります。

⑦ 図10を見てください。

これは「貝杓子」または「貝柄杓」で、ヤコウガイの自然のカーブをうまく活かして丁寧に切り取り、研磨を施したもので、一般に柄の部分も加工されています。柄は単純なものから、華麗な装飾を施したものまであります。また、柄に孔を開けたものもあります。これは祭祀儀礼用に使われたものと考えられています。なお、これまで貝匙に含めていましたが、通常の食事用のスプーンよりもかなり大きいので、杓子とするのが適当です。

⑧ 図11を見てください。

これは「貝匙」で、それでがいの水管溝のくぼみを活かして、タテ長の匙にしたものです。ゴホウラやクモガイがよく利用されています。

⑨ 図12を見てください。

これは「貝皿」です。しゃこがいの縁を軽く打ち欠き、さらに研磨を施して掴みやすくしたもので、大型と小型があり、主に食事などを盛るのに使われたと見られます。

⑩ 図13を見てください。

これは「貝煮沸器」と考えられているもので、ホラガイの腹部に一つ、または二つの孔が開けられています。民俗例で、この孔を木製の鉤で吊るして、火にかける「ほらやかん」があることから、同様の使用が推定されています。火を受けた跡が残る貝もありますので、煮沸器であった可能性は高いようです。

⑪ 図14を見てください。

これは「貝輪または貝製腕輪」です。二枚貝の縁を残して円環状に加工したものや、巻貝の背面や腹部を加工して輪にしたものがあります。貝はオオベッコウガサ、サラサバティ、うみぎくがい、オオツタノハ、いもがい、ゴホウラなどが使用されています。

これが実際に腕輪であったことは、オオベッコウガサの貝輪を8枚腕に着けた、埋葬人骨が発見されていることからも証明されています。いもがいやゴホウラは、別項で扱うように交易品として採取され、自然貝が九州の弥生時代～古墳時代の社会に持ち込まれて、腕輪の材料となりました。そのため、運搬に便利なように多くの貝を結び、重さを減らし、しかも貝輪を作る際の成功率（歩留まり）を高めるために、交易用の貝にあらかじめ沖縄側で孔を開けておくということもありました。

⑫ 図15を見てください。

これは「貝指輪」で、いもがいやマガキガイで作られていますが、数はとても少ないです。九州弥生文化に指輪をはめる習俗があり、その影響かも知れません。

⑬ 図16を見てください。

これは「貝垂飾り（ペンダント）」です。サメの歯の形を模した貝製品で、もともとイタチザメやホオジロザメの歯に孔を開けたペンダントがあります。おそらくサメの歯が入手できない場合の代替

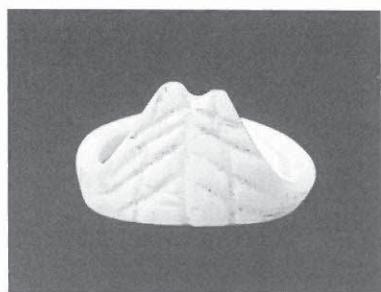


図15 貝指輪（「宇堅貝塚」
具志川市教育委員会 1991）

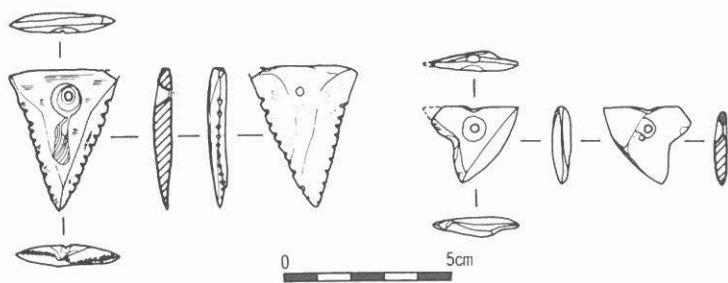


図16 貝垂飾（「シヌグ堂遺跡」沖縄県教育委員会 1985）

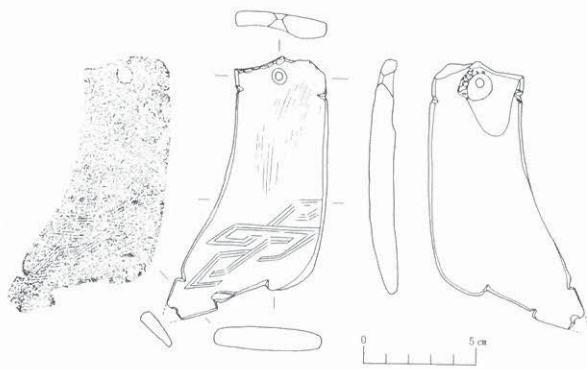


図17 屁型貝製品
(「面縄第一貝塚」伊仙町教育委員会 1985)

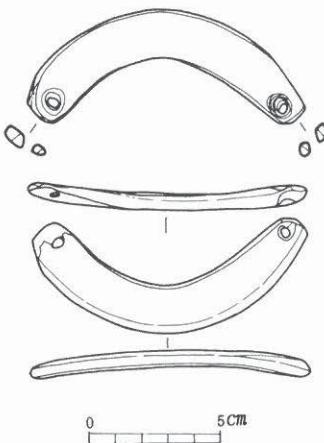


図18 半環状貝輪
(「地荒原貝塚」具志川市教育委員会 1986)

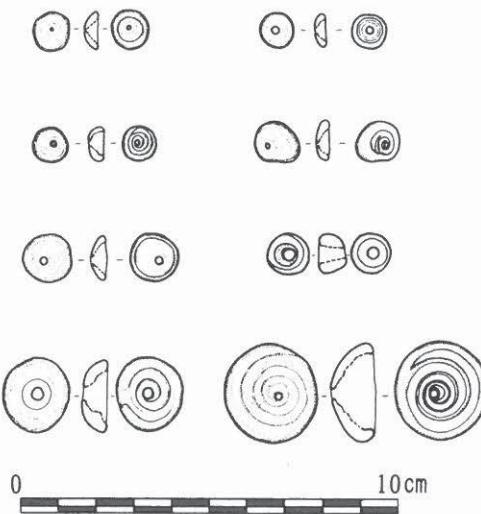


図19 貝玉類
(「渡具知木綿原遺跡」読谷村教育委員会 1978)

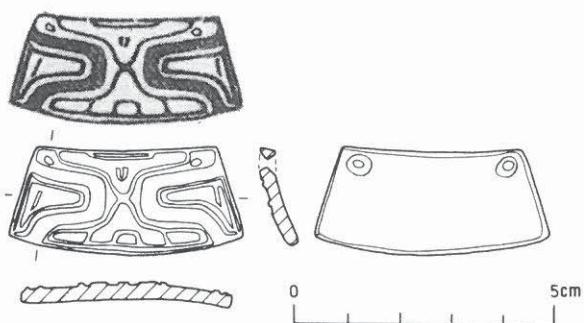


図20 貝符
(「清水貝塚」具志川村教育委員会 1989)

品かと見られます。また、サメの歯の三角形が原形となった、大型のいもがい製三角形ペンダントも作られています。

⑭ 図17を見てください。

これは「庇型貝製品」で、帽子の庇型に似た半月形の平たいオオツタノハ貝製品です。発見例はかなり少なく、奄美出土例は両端に孔がありますが、沖縄のものは孔がありません。南太平洋諸島の「胸飾り」に似ています。

⑮ 図18を見てください。

これは「半環状貝輪」で、完全な輪にならない弧状の貝輪です。両端に孔がありますので、二つをヒモで結んで一つの腕輪にしたのでしょう。

⑯ 図19を見てください。

これは「貝玉」です。小玉と臼玉があります。いもがいやマガキガイの端部片が波に洗われて自然に中空になったものを、そのまま、あるいは少し研磨を加えたものが小玉で、臼玉は丁寧に研磨加工されています。

⑰ 図20を見てください。

これは「貝符または貝札」です。アンボンクロザメやクロフモドキなどの大型のいもがいの体層部を切り取って、表面に様式的な紋様を浮き彫りにしたものです。沖縄よりはるか北の種子島広田遺跡の下層・中層で多数出土し、そこで人骨に添えられていたことから、装身具であったことがわかりました。沖縄では久米島で中層タイプが数例発見されています。

⑱ 図21を見てください。

これは「彫刻・彫画貝製品」です。主にいもがいやゴホウラなどの厚い貝を素材にしています。縁を加工して全体像を輪郭によって表現する彫刻貝製品と、貝の表面に彫り込みをして表現する彫画貝製品があります。縄文時代並行期に骨製、貝製の獣形・蝶形の装飾品が流行し、やがて貝製が増えるようになり、後期には貝製だけになります。これらには小さな孔が開けられていますので、衣服などに装着する装身具だったものと考えられます。

⑲ 図22を見てください。

これは「貝盤」で、大型のいもがいの殻頂部を円盤状に加工したもので。中央に孔が有るものと無いものがあります。

⑳ 図23を見てください。

これは「擦り切り穿孔貝」で、たけのこがい、いもがい、ふでがいなどの表面に、主にタテ（長軸）方向に擦って、溝状の孔を作り出したもので、ていねいに仕上げています。

㉑ 図24を見てください。

これは「明器？貝札」で、貝札（または貝符）のうちの、種子島上層タイプです。これは広田遺跡では遺体に副葬された明器で、いもがいの体層部を長方形に切り取り、その表面に彫刻を施しています。沖縄諸島の先史時代遺跡からも各地で発見されていますが、人骨に伴って副葬品として出土した例はありません。

㉒ 図25を見てください。

これは「有孔貝」です。二枚貝に孔を開けたもので、埋葬人骨の上に被さるように多数置かれていたことから、副葬品であることがわかります。しかし、もともとは死者に漁網をかぶせたものが、貝の錐だけが残されているとする見解もあります。

㉓ 図26（写真）を見てください。

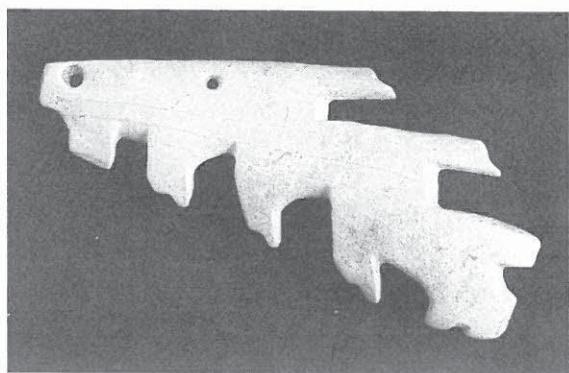


図21 彫刻、彫画貝製品
(「地荒原貝塚」具志川市教育委員会 1986)

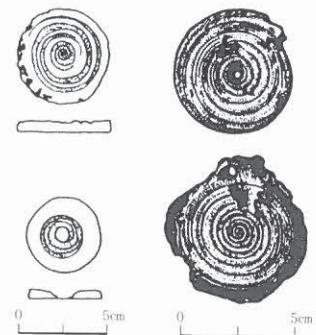


図22 貝盤（左：「崎枝赤崎貝塚」石垣市教育委員会 1987）（右：「フィリピン・デュ ヨン洞穴」フィリピン国立博物館 1970）

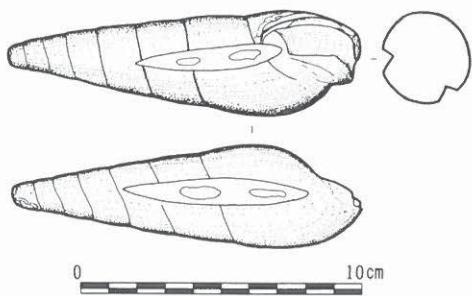


図23 擦り切り穿孔貝（「渡具知木綿原遺跡」読谷村教育委員会 1978）

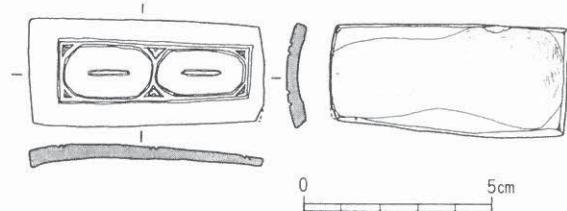


図24 明器?
(「広田遺跡」広田遺跡学術調査研究会 2003)

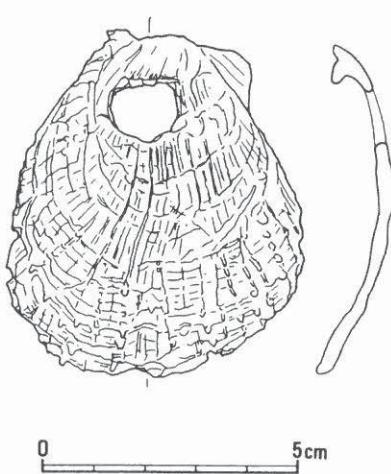


図25 有孔貝（「伊是名貝塚」伊是名貝塚学術調査団 2001）



図26 しゃこがい（「安座間原第一遺跡」宜野湾市教育委員会 1990）

沖縄先史時代の埋葬人骨の頭部付近に、加工されていない自然のしゃこがいを添える、あるいは頭をしゃこがいで囲む習俗があったことが数例知られています。しゃこがいは現在まで呪力をもつものとして門柱などに飾る習俗がありますから、埋葬遺体への添付は死者の魂を鎮めるためだと思います。貝そのものに加工はありませんが、貝文化のひとつといえます。

以上で北琉球の貝文化の話を終わり、次に南琉球の貝文化の話をします。

1番目に南琉球先史時代の貝製品の種類について話します。南琉球の先史時代遺跡からは、貝錘、スイジガイ製利器（刺突具）、二枚貝製の貝刃、貝蓋敲打器、煮沸容器、臼玉、しゃこがい製貝斧、葬具としての自然貝などが出土しています。一般に南琉球先史時代の貝文化は装飾性に乏しく、貝器の種類もあまり豊富ではありません。

2番目に南琉球先史時代の貝斧文化について話します。図27を見てください。

南琉球である宮古・八重山諸島にしゃこがい製の貝斧が分布しています。南琉球の先史時代（新石器時代）は前期と後期の2時期がありますが、貝斧は後期にのみ見られます。後期は一部に約2500年前の年代測定値がありますが、一般的には約2000年前から約900年前の時期になります。

貝斧は南太平洋諸島などの、南方文化を代表する物質文化として知られていますが、先史時代から近年まで、主に丸木舟を造る工具として使用されたようです。もともとはサンゴ礁だけの島で石材がないことから、石斧の代用品として製作されたといわれています。

しかし南琉球の場合は、石斧の材料となる原石が入手できる島でも、貝斧が製作使用されています。これは、南琉球に移住してきた集団が、もともと持っていた文化的伝統を持ち込んだことを示しています。

それでは、南琉球の貝斧文化はどこから伝わったのでしょうか？ その手がかりとして、まず南琉球の貝斧の特徴を確認しましょう。第一にその材料はほとんどしゃこがいです。

第二に、しゃこがいの蝶番部を利用したものがほとんどです、第三にわずかながら貝の腹縁部を放射肋に沿って加工した丸ノミ形貝斧があること、第四に、腹縁部を利用した扁平貝斧がほとんど無いこと、などが指摘できます。

これらと比較して、ミクロネシアなどの南太平洋諸島の貝斧文化を見ますと、しゃこがいに限らず数種の貝を利用した多様な形の貝斧があること、腹縁部利用の扁平貝斧が多いこと、丸ノミ形貝斧が少ないとなど、南琉球とはかなり異なっています。

一方、フィリピン先史時代の貝斧文化は南琉球の貝斧文化とよく似ています。したがって、南琉球の貝斧文化は、フィリピン方面に関連しているものと考えられます。

しかし、この貝斧文化は南琉球先史時代後期のすべての遺跡から出土するわけではなく、まったく出土しない遺跡と大量に出土する遺跡という偏った傾向があります。これを時期差とみるか、あるいは文化的集団の相違とみるかが課題となっています。

なお、北琉球圏でも久米島でヤコウガイ製・しゃこがい製、伊江島でしゃこがい製の貝斧が出土していますが、偶然単発的に製作されたもので、明らかに石斧を模した形であり、南琉球の貝斧とは異なります。また、文化的広がりもありません。

また、九州の鹿児島や韓国でも貝斧が発見されていますが、これは扁平貝斧で明らかに南太平洋諸島タイプです。おそらく旅行者などによって南太平洋諸島で採集された貝斧が、後に持ち込まれたものだろうと思います。

3番目に、スイジガイ製利器について話します。これは南北に共通する文化で、しかも他の地域で

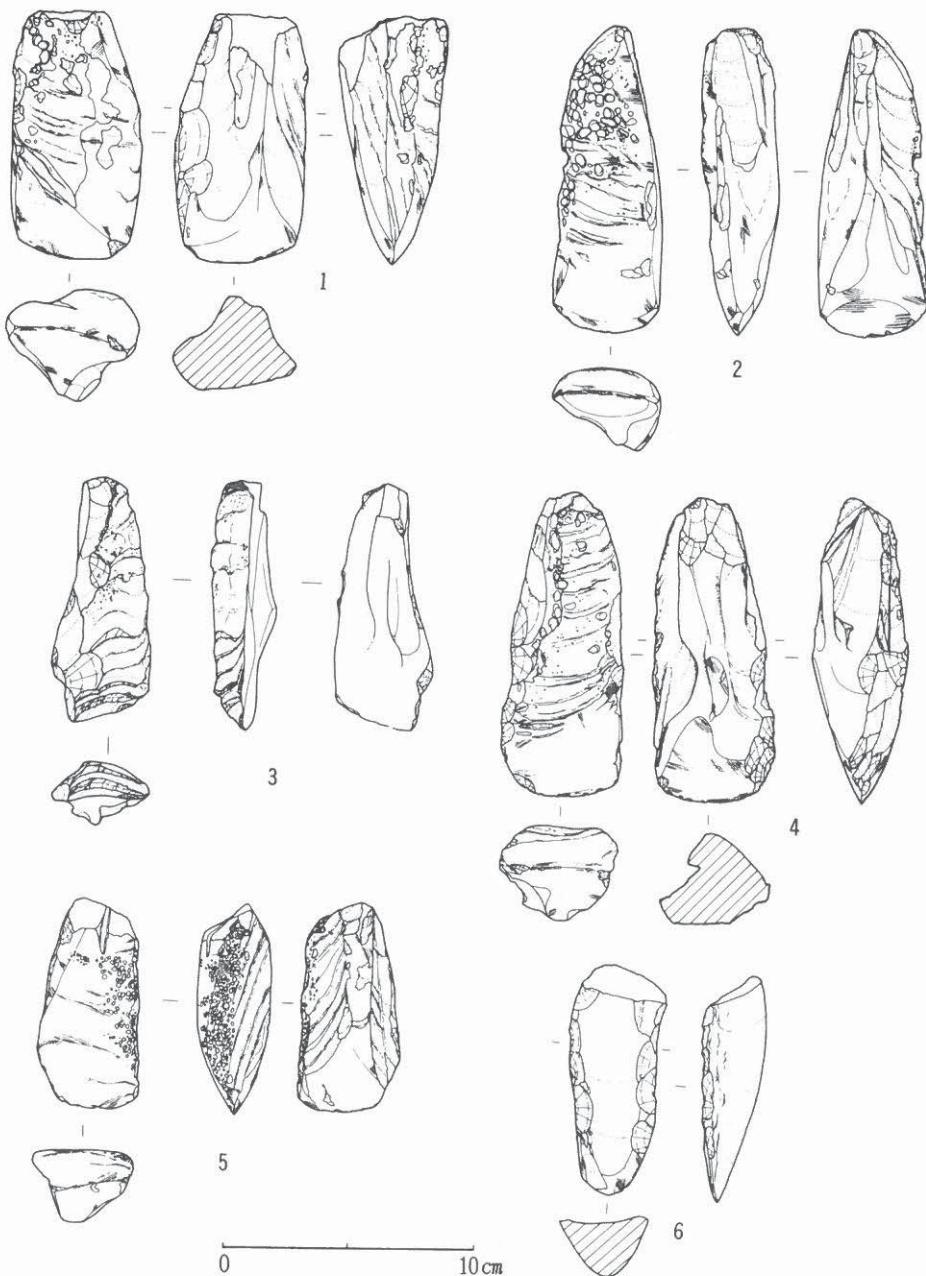


図27 シャコガイ製貝斧（「長間底遺跡」沖縄県教育委員会 1984）

はほとんど分布しない、琉球圏独自の貝器です。スイジガイの突起（棘部）の先端を刃状にし、体層部を握り部分として使用したと考えられますが、実際の用途は未だわかりません。おそらく海底から貝を採取する掘り具、何かを突き刺す用途なのかも知れません。

一方、それは実用だけではなくて、なかにはスイジガイに呪力をもたせるために、擬似的な刃部をつけ、これを吊るしたりして魔除けとしたものもあるかも知れません。なぜならば、現代まで沖縄には魔除けや災厄除けの呪具として、加工はしないがスイジガイを家畜小屋の前に吊るす習俗があるからです。

以上で、南琉球の貝文化の話は終わり、次に再び北琉球に戻って、貝交易の話をします。

1番目に貝交易のあらましを話します。

貝交易は正確には「貝殻交易」です。中身の肉が干物や漬物にされて交易されたのではなく、貝殻が腕輪や螺鈿細工の材料として交易の対象となったわけです。約2千余年以前、九州沿岸部の弥生時代人が沖縄にやってきて、貝輪の材料として大型の貝を求めるのが始まりで、それから数世紀の間続きました。沖縄側からすると、弥生社会の需要に応える、すなわち「貝を求めて来たので、準備して提供する」という受身的な交易だったよう見えます。

農耕が普及し、新しい階級社会、古代国家を築きつつあった九州弥生時代の首長層や、それと一体をなす司祭者層は、その権威のシンボルとしてさまざまな装身具を身につけて威信財としました。

そのなかで、おそらく司祭者たちが美しい輝きと渦巻き状の形をもつ巻貝を好み、これを腕輪として着装する習俗が流行したのでしょうか。その腕輪の材料となったのは、暖かい沖縄の海で採れるゴホウラ貝やいもがいでした。ゴホウラ貝製腕輪は男性が、いもがい製腕輪は女性が着装するという傾向もありました。

これらの貝輪は沖縄で造られたのではなく、九州北部に貝殻が運ばれて腕輪に加工されました。そして、弥生社会のリーダー層が貝輪を着装する習俗は、九州だけでなく日本各地に広がりました。遠くは北海道まで達しています。

沖縄へ貝を求めて渡来してきたのは、九州沿岸の弥生人たちでした。それに応えて沖縄側では、ゴホウラ貝やいもがいを予め採取して蓄えていたようです。沖縄先史時代後期の遺跡から、整然と並べられたいもがいやゴホウラ貝の集積遺構が、しばしば出土していることからそれがわかります。

ゴホウラ貝はサンゴ礁湖（ラグーン）にではなく、外海の水深10余mの深いところに棲んでいます。実は今でも多数棲んでいるにもかかわらず、方言名は伝わっていません。それは、この貝交易の時期だけ外海に潜り、九州からの需要がなくなるとまったく採取しなくなつたので、地元にさえ忘れ去られてしまったと考えられます。

ところで、いもがいやゴホウラ貝を提供した沖縄先史時代人は、見返りに何を受け取ったでしょうか？ 沖縄の遺跡からは九州の弥生土器がよく出土します。しかし、土器は沖縄にもありますから、交易の対象ではなかったと思います。その中身が交易の対象だったかも知れません。

それは弥生社会に普及した米ではないかという説があります。しかし、当時の沖縄の遺跡からは米や稻作の証拠はまったく発見されていません。鉄器や青銅器も少量出土していますから、あるいは金属器が対価かも知れません。特に金属器は貴重品で、伝世されていきますから、遺跡では少なくとも、実際にはその数倍、数十倍の金属器がもたらされたとも考えられます。

貝交易は日本の古墳時代まで続けられますが、7世紀頃には需要がなくなつて途絶えてしまいます。ところが、この時期以降、奄美諸島から八重山諸島にかけて中国唐代の銭貨「開元通寶」が遺跡から出土します。そして、同じ時期に（同じ遺跡からではありませんが）大型巻貝のヤコウガイが出土する遺跡があります。

この二つの現象を結びつけて、ある考古学者は中国唐朝の螺鈿工芸の材料として、琉球諸島のヤコウガイが交易によって中国へもたらされたのではないかと主張しています。琉球と中国の間に貝交易が存在していたのではないかというわけです。

そして9世紀には日本でも螺鈿細工が発達し、日本とのヤコウガイ交易がおこなわれるようになつたのではないかという作業仮説を立てています。さらに11~12世紀頃、琉球諸島全体を通して、九州産の石鍋、奄美徳之島産の須恵器（カメヤキ）、中国産磁器などが出回るようになります。この現象についても前述の学者は、沖縄のヤコウガイを求めて来た交易集団が、その対価として運び込んだ交

易品であったと理解しています。

このような理解をもとにその学者は、おそらく九州福岡の博多港を拠点とした交易ネットワークが、琉球圏にまで延びてきたのであろう、そしてヤコウガイ交易の展開のなかで、稻作が琉球に導入され、農耕社会、階級社会へと向かうようになった、こうして、中国や日本との貿易が、沖縄の経済と社会の変化を促す重要な契機となったのではないかと推定しています。

しかし、この仮説には肝心なことが抜け落ちています。そもそもヤコウガイが集中的に出土しているのは奄美諸島のいくつかの遺跡にすぎず、沖縄諸島ではほとんど発見されていません。したがって、7世紀頃から12世紀頃にかけて、沖縄諸島人がヤコウガイ交易をしていたかどうかはまだ明確ではありません。ただし、9世紀以降の日本社会に、ヤコウガイが螺鈿工芸の材料としてもたらされているのは事実のようです。

2番目に貿易は沖縄の農耕開始と階級社会形成に関与したかどうかについて話します。

九州の貿易集団と沖縄先史人が交渉関係をもつなかで、すでに農耕社会に入っていた九州の稻作が沖縄に伝えられ、それが普及して、やがて沖縄の経済・社会の変化を促したとするのは、大局的、長期的には正しいと考えます。

しかし、九州と沖縄の関係は貿易だけではありません。沖縄諸島と九州との間には、情報圏、交渉圏が縄文時代以来強弱の差はありながらも、存在し続けていました。そのようなゆるやかな関係のなかで、沖縄側が真に必要としたときに稻作を導入したのだろうと思います。

米はあらゆる条件のもとでも、すぐれた食料だとするのは妥当ではありません。なぜなら、あれだけ盛んにいもがい、ゴホウラ貿易を展開した弥生時代並行期に、沖縄先史人たちは稻作を導入した形跡がまったくないからです。反対に、その時期は沖縄先史時代のなかで、最も自然物採取が豊かな時期であったことがわかっています。

したがって、米は貿易の対価ではありませんでした。選択の問題として稻作農耕の情報を提供されながらも、これを受け入れなかった時期があったわけです。貿易を主体に九州・日本と沖縄の交渉・影響関係が展開したかのように考えるのは、当時の状況を一面的に捉えてしまう恐れがあると考えます。

3番目に、韓国と沖縄の貝文化との関係について少しだけ話します。

すでに5世紀には、韓国南部で沖縄産と見られるゴホウラ貝製釧（腕輪）が伝わっているようです。また、5～7世紀頃の遺跡で、いもがいを嵌め込んだ馬具が7箇所で発見されているそうです。この調査研究をした学者によれば、おそらく九州からもたらされたいもがいが、韓国において馬具の金具の中に嵌めこむという新しいデザインとして使われるようになったもので、そのいもがいは沖縄産だろうということです。そして、その後韓国の馬具文化が日本に伝わり、元々いもがいの装飾になじんでいた日本でも、馬具に嵌め込むことが流行したようです。

4番目に、中国と沖縄との間に貿易が存在したかどうかについて話します。

この課題はあまりに壮大でよくわかりませんが、中国の文物は古くは明刀銭、五銖銭が、7世紀以降には唐代銭貨「開元通寶」が出土しています。12世紀以降は磁器が出土します。これらの文物は中国との直接交易によってもたらされたものなのでしょうか？ そして、そのどれかは貿易の対価だったのでしょうか？ 中国との貿易の存在そのものが不明ですので、これは今後の大きな課題といえます。

それでは最後にまとめの話をします。

沖縄はサンゴ礁に囲まれた小さな島々です。島を取り巻く浅い海には多種多様な魚や貝が棲み、先

史時代の人々にとって重要な食料資源となっていました。そして、貝殻はその美しい形と光沢、加工を容易に受け入れる手ごろな材質をもつことで、暮らしのなかの用具・用品や身を飾るもの、あるいは邪気をはらう呪具として、積極的に利用されてきました。

やがてその一部は交易の対象となり、九州との貝の道が通じることとなりました。また、ヤコウガイの交易が存在していたことも解明されようとしています。

一方、南琉球ではしゃこがい製の貝斧文化が先史時代後期に流行しましたが、それは文化的伝統としてもたらされたものであり、その集団の故郷を探る手がかりになります。また、スイジガイ製利器は琉球諸島地域にだけ見られるもので、独自の貝文化を展開しています。

貝は沖縄先史時代人にとって貴重な食料であり、暮らしを支え、便利にし、彩る重宝な素材であり、時には外部との交渉関係を取り持つ交易品にもなりました。そして、これらの貝文化は、沖縄先史時代人の生活と文化、対外関係、さらには集団および文化の系譜を知る手がかりともなるものです。

以上で、私の沖縄先史時代の貝文化についての話を終わります。

ありがとうございました。

(あさと しじゅん 前沖縄県立埋蔵文化財センター所長)